知床財団がお届けする 知床の自然情報誌SEEDS（シーズ）
公益財団法人 知床財団　発行日 2017年2月8日

SEEDS

知床財団
SHIRETOKO NATURE FOUNDATION

No.233
2017 / 冬号

活動レポート
クマ対策 ～幌別川の現場から～

自然特集
鳥の楽しみ方いろいろ

知床・人・インタビュー 第29回
田中純平さん

スタッフの本棚 第23回
野生の国の獣医

知床財団購買部
新たな軍手ファミリー

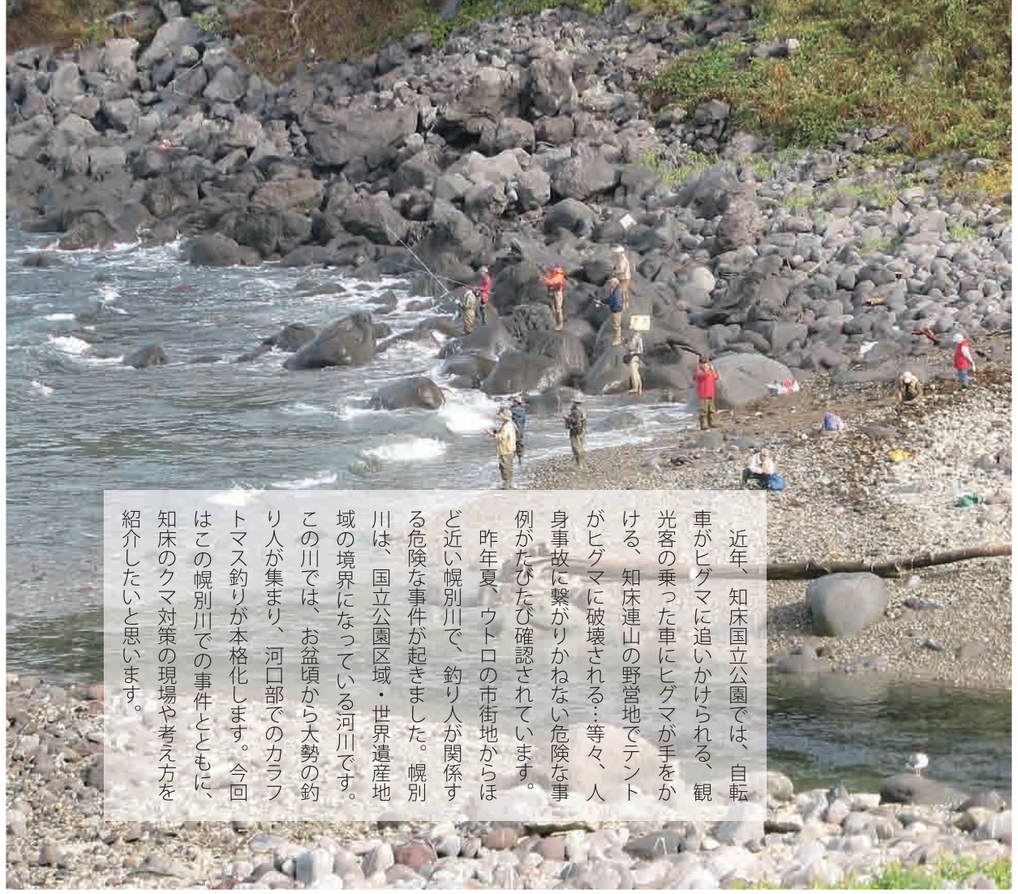
ココだけのはなし 第4回
活動レポート「クマ対策」によせて

写真：幌別川河口をパトロールするスタッフ

活動レポート

「クマ対策～幌別川の現場から～」

文・葛西 真輔　保護管理研究係主任



近年、知床国立公園では、自転車がヒグマに追いかけられる、観光客の乗った車にヒグマが手をかける、知床連山の野営地でテントがヒグマに破壊される…等々、人身事故に繋がりかねない危険な事例がたびたび確認されています。

昨年夏、ウトロの市街地からほど近い幌別川で、釣り人が関係する危険な事件が起きました。幌別川は、国立公園区域・世界遺産地域の境界になっている河川です。この川では、お盆頃から大勢の釣り人が集まり、河口部でのカラフトマス釣りが本格化します。今回はこの幌別川での事件とともに、知床のクマ対策の現場や考え方を紹介したいと思います。

クマ対策とは何か？

人とヒグマのあいだで発生する軋轢を解消する、もしくは最小化するための活動を称して〝クマ対策〟と私たちは呼んでいます。知床財団で行うクマ対策の大部分は、環境省や町役場からの受託業務で、その活動範囲は斜里町と羅臼町が主です。

クマ対策の究極の目的は、知床半島に暮らすヒグマの個体群を健全に維持することです。この目的を達成するためには、三つの条件が必須です。一つ目の条件は「人身被害ゼロを継続すること」、二つ目の条件は「経済被害を最小化すること」です。経済被害には、農作物被害や家屋侵入などの物損被害などが含まれます。ヒグマの個体群を健全に維持するためには、地域に暮らす人たちにヒグマの存在を受け入れてもらうことが大前提です。そのために、これら二つの条件は必須です。

そのうえで、「地域にヒグマに関する正しい知識を普及すること」、これが三つ目の条件です。ヒグマがどのような生き物か知ってもらい理解を深めてもらうこと、軋轢を発生させないためにはどういったことに気を付けるべきなのかを知ってもらうことは、ヒグマとうまく付き合っていくことに直結します。

職員は出没情報をもとに現場へと急行する。写真はヒグマによって荒らされたゴミが散乱した現場を確認しているところ。

クマ対策の流れ

事務所には、ヒグマの目撃や痕跡に関すること、またヒグマによる被害など、多くの情報が各所から入ってきます。私たちは役場や猟友会と協力し、利用者や住民、自らの安全を確保しながら危険性を判断し、迅速に現場で対処します。

一．出没情報の収集
目撃者や被害者からヒグマの情報を聞き取ります

二．現地調査と危険性の判断
現地を調査し、危険性を判断します

三．状況に応じた現地対応
看板の設置やチラシの配布、電気柵の設置、誘引物の除去、出没したヒグマの追い払いや移動放獣、ヒグマの捕獲を行います

昨年夏に幌別川で起きたこと

事件の発端は8月24日午後、ある地元関係者からもたらされた情報から始まります。その情報は、幌別川に単独のヒグマが1頭出没しているというものでした。現地に行ってみると、ヒグマは単に姿を見せただけでなく、河口部に置いてあった釣り人の自転車を破損させていたことが判明しました。本来なら人間を警戒するヒグマが、そうしたものに接触するのは稀です。ましてや、日中に人の気配がある場所でそのような行動を取ることは、明らかに人間に対する警戒心を失いつつあるサインでした。

翌日以降も、釣り人の荷物を荒らす、釣り人に接近し釣った魚を横取りするといった悪い出来事は続きました。

出没を繰り返していたのは、オス2歳の単独個体（個体名：SP）でした。河口には釣り人のさばいた魚の残滓が常にある状態です。SPがこの状況を学習しているのは明白でした。看板を立てたり、パトロールを行い、釣り人に注意を呼びかけました。また、ヒグマが出没するたび、追い払うことを何度も繰り返しました。ときには、夜明けからスタッフが現地で待機し、出てきたヒグマを追い払うといったことも行いましたが、状況は好転しません。そのうちに、ヒグマが人間に接近してきたといった情報も釣り人から入るようになります。

このようなトラブルが発生した背景には、再三の注意喚起にも関わらず、釣り上げた魚や荷物が適切に管理されていないこと、さばいたあとの魚の残滓を放置するなどし、人間の近くにヒグマを引き寄せたことがあったと思います。

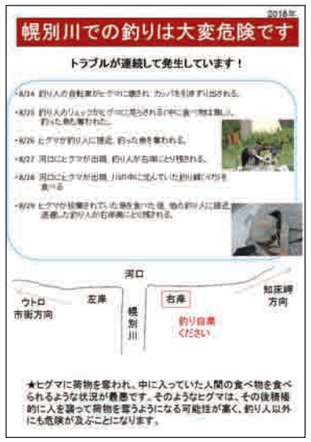
自転車に近づき、サドルにかじりつくヒグマ（SP）。本来なら人為的なものには自ら積極的に接触しないはずなのだが…。

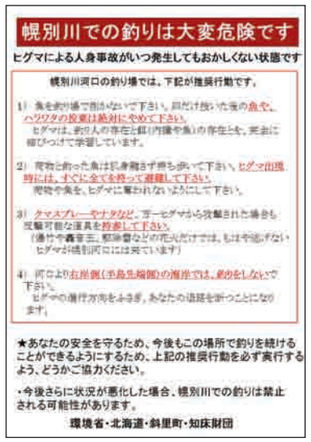
立入禁止とその後

ヒグマが人間に接近してきた状況を、人身被害が発生しかねない危険なサイン、人間の安全を脅かす危険なサインだと私たちは判断しました。行政と協議し、9月2日付けで幌別川河口への立ち入り禁止措置を取ることとなりました。

立入禁止後も、幌別川河口から釣り人の姿が完全になくなることはありませんでした。行政からの一方的ともいえる立入禁止、罰則もなく法的な拘束力もない立入禁止に素直に従わないというのは、ある意味で自然なことなのかもしれません。しかし立入禁止以降、幌別川河口でのヒグマの出没は確実に減りました。理由ははっきりしませんが、魚の残滓が散乱するような状況が改善された結果、ヒグマにとって簡単に食べ物が手に入る魅力的な場所でなくなったこと、釣り人がヒグマに魚を取られないように気を付けるようになったことが関係していると考えています。

なぜそうした状況に変化したのか、それはある釣り人たちの働きかけがあったからでした。働きかけを行ってくれたのは、幌別川の釣りを大事に思う地元の関係者（釣り人）や知床から離れた場所に住みながらも長年、釣りのために幌別川に通って来ている常連の釣り人でした。





立入禁止措置の前から地元の有志の人たちは、このチラシを現地で配布したり、釣り人に注意を呼び掛けてくれていた。

パトロールによる経過観察、幌別川を大事に思う釣り人を交えた意見交換会等を経て、立入禁止から2週間後の9月16日に立ち入り禁止を解除することとなりました。立入禁止の解除を決めたのは、特定のヒグマが毎日出没する状況でなくなったこと、安全対策のための新たな取り組みを実施する体制が整ったことによります。安全対策のための新たな取り組みには、①有志による「幌別の釣りを守る会」が立ち上がり、彼らが早朝から現地パトロールを行うようになったこと、②試行的に魚内臓回収ステーションを設置することで、残滓の管理をしっかりと行う環境が整ったことが含まれています。

その後、守る会の普及啓発活動や継続的なパトロールにより、11月現在まで幌別川河口では大きなトラブルがなく、クマ対策のシーズンが終わろうとしています。

「幌別の釣りを守る会」と地元関係者とが一緒になって回収ステーションを設置した。

定時に回収ステーションを確認する知床財団職員。

今回の事件では、一時的ではあるものの立入禁止という措置を取りました。この対応は、ヒグマによる人身事故を回避するためのやむを得ないものだったと思っています。人身事故が発生したあとに、あの時にこれをやればよかった、あれをやればよかったと後悔することだけはしたくありませんでした。人身事故を起こさないため、その時点で自分たちができる最大限のことをやったと私は思っています。

また別の選択肢として、一連の出来事を解決するため問題のヒグマを捕殺するという方法もあったと思います。しかし、今回はそれを選択することはしませんでした。幌別川はヒグマの生息地です。魚の残滓を放置するといった行為を改めない限りは、根本的な解決にならず、同じようなヒグマが再び現れることは明らかだと考えたからです。

「幌別の釣りを守る会」赤澤歩さんの言葉

ぼくはウトロで生まれ育った。

僕の先祖は大正4年に入植し、幌別川河口に打ちあがった木材などを拾い集め、川から500メートルほど離れた小川の側に小屋を建て、同じころ入植した祖母は水をくむため幌別川へ通った。僕も今なお、幌別地区で暮らしている。だから幌別川で過ごす時間は僕にとって特別であり、また釣りで得た魚は森で採る山菜とあわせて大切な生活の糧となっている。

幌別地区において、ヒグマと人との距離が縮まった要因には、釣り人の行動や不注意もあるが、観光客のえさやりや異常なまでの接近を繰り返す一部のカメラマン、ヒグマ対処方法の周知不足など様々なことがあげられる。従って、幌別での問題の責任をすべて釣り人に押し付けてはならない。

そもそも安全を担保されたエリアなど知床にはない。ヒグマのリスクを理解したうえで自己の責任において判断、行動している釣り人もおり、そういう人に対して僕は声をあげて尊重した。

まず、行政や知床財団は幌別地区の状況と課題を徹底的に絞り出し、そして明確な方針を早く示すべきだ。そしてルールやマナーの周知の徹底、さらにヒグマへの対処方法の実効性を高める工夫も急がれる。

今回「幌別の釣りを守る会」を結成したが、これを機に地域住民と行政、知床財団などが膝を突き合わせて話すような場を持続的に設け、情報共有やルールの確認を行い、知床が誇れる幌別固有の釣りスタイルをみんなで築き上げていきたい。

河口のゴミを拾う「幌別の釣りを守る会」と地元関係者たち。

幌別川河口におけるSPの出現状況と対策活動の経過

月日	SPの行動	対策活動
8月3日	(8/3〜8/24は出現を確認できず)	マス釣りが本格化する時期に合わせて、釣り人へ荷物や残滓の管理をしっかり行うよう呼びかける看板を設置
8月24日	ヒグマが釣り人の自転車のサドルを壊す	問題発生後、朝夕を中心に1日複数回のパトロールを行い、釣り人に口頭で状況を伝えて注意喚起を行うとともに、トラブルの概要を釣り人に知らせる看板を現地に設置
8月25日	ヒグマが釣り人のリュックを荒らす	
8月26日	ヒグマが釣り人に接近、釣りあげて残置してあった魚を横取りする	
8月27日	幌別川河口にヒグマが出現、右岸の釣り人が戻れなくなり孤立する	
8月28日	ヒグマが釣り人の投棄した釣り餌(イカ)を食べる	
8月29日	ヒグマが釣り人の残置した魚を食べた後、釣り人に接近してくる。最接近距離は5m、ヒグマはやや興奮気味だったとのこと。この際、右岸にいた釣り人が戻れなくなり孤立する。	さらに危機的な状況を伝える内容のチラシを作成し、地元の有志にも協力していただき、幌別川河口を利用する釣り人に配布。
9月2日		幌別川河口への立ち入りを禁止。 パトロールを適宜行い、幌別川に立ち入る釣り人がいた場合には状況を説明し、退出をお願いする。
9月8日		釣り人有志と関係機関による意見交換会を実施。実質的な事故防止には釣り人自身も加わってルールを周知・徹底することが効果的であることが話し合われる。
9月9日		「幌別の釣りを守る会」が発足。
9月16日		幌別川河口への立ち入り禁止措置を解除。

※対応については、特記事項のみ記載。上記以外にも日常的なパトロールなどを随時実施していた。

クマ対策を通じて守りたいもの

今回の事件で私は、クマ対策を通じて何を大事にしたいのかを改めて考えさせられました。

私が守りたいと思っているのは、〝知床の価値〟です。〝価値〟には、地域住民が安心して生活できる知床、農業や漁業を営みながら暮らすことのできる知床、観光で訪れた人が思う存分、自由に自然を楽しむことのできる知床、ヒグマなど野生生物にとってのかけがえない生息地である知床等々、人間と野生生物の双方にとって有益な要素を含んでいます。また私が守りたい〝価値〟には、人間と野生生物とのつながりをも含んでいます。たとえば、野生生物の観察、狩猟や山菜取り、そして釣りもその対象です。

理想と現実が異なるのはある意味で当たり前のことです。世の中で、理想=現実となっていることは皆無でしょう。しかし、たとえすこしずつであっても、自分たちが出来ることを行いながら、着実に前進していくことが現実を好転させる唯一の方法だと思っています。クマの対策について言えば、電気柵の普及、クマに荒らされないゴミステーションの開発とその普及、ヒグマ授業等々、ヒグマと共存するための努力、被害を防止するための努力をどの程度行っているかが、次のステージに繋がる唯一の方法と私は信じています。

葛西が考えるヒグマ対策8か条

- ヒグマによる人身事故を起こさせない。
- ヒグマを人に慣れさせない&人をヒグマに慣れさせない(緊張感を保つ)。
- ヒグマに悪い学習をさせない。
- つまらない〝知床〟にしない(立入禁止や利用禁止といった方法に安易に頼らない)
- 〝捕殺〟という手法だけに頼らない。
- ヒグマを知る努力を怠らない(ヒグマを良く知る)。
- 重大な事件に繋がる予兆を見落とさない。
- 地域を大事に考える(地域と一緒に取り組む)。